

第37回全国中学生人権作文コンテスト中央大会 奨励賞
第37回全国中学生人権作文コンテスト熊本県大会 最優秀賞(熊本県人権擁護委員会会長賞)

福島から伝えてくれてありがとう

菊池市立泗水中学校卒業生 大賀唯人

「甘っ！おいっ！」
今年も僕は桃を食べながら幸せな気分になっていました。去年・今年と、美味しい桃が届いたから、とおすわけで頂いたのは福島からの桃でした。それは大きくて甘い香りのするきれいな色の桃でした。

させてしまつてごめんなさいって伝えたくなる」と言っていました。熊本地震の時、宮城から5年前の恩返し、のメッセージをトラックに貼って物資を届けてもらった事が話題になりました。東北からの恩返しに、勇気と希望をもらって、あの時確実に熊本のみんなは元氣になったと思います。遠い東北の地から支援物資を届けるだけではなく、同じ傷みを知っているからこそあんなかい言葉に、本気で有り難いと思いました。

二〇一六年四月、僕は熊本地震を体験しました。震源地からは離れていますが、僕の住む菊池市でもあちこち被害があり、経験したことのない揺れを知った恐怖心と、それまでの日常が一変したことは違いありませんでした。それでも日々、全国の方々からの支援や励ましに支えられ、僕たちは生活を取り戻していくことが出来ました。

しかし、彼女の作文の中にあつたように、現実には起きたことは事実として受けとめなければいけません。地震から三ヶ月後の時、僕は福島県で全国各地の中学生と共に寝泊まりをいろいろな講義を受けました。僕が見た福島県は緑が美しく、人も優しくあつたです。しかし六年経つた今も、帰還困難区域があること、解除されても帰ってくる人が少ない現実も知りました。帰りたくても帰れない

頃、母が一つの作文を僕に読んでほしいと言いました。インターネットで見つけたそうです。いつもと違う様子で、低い声で、それ以上は何も言わず、その作文をスマートフォンで画面に出して手渡

たように、現実には起きたことは事実として受けとめなければいけません。地震から三ヶ月後の時、僕は福島県で全国各地の中学生と共に寝泊まりをいろいろな講義を受けました。僕が見た福島県は緑が美しく、人も優しくあつたです。しかし六年経つた今も、帰還困難区域があること、解除されても帰ってくる人が少ない現実も知りました。帰りたくても帰れない

2017(平成29)年度
菊池市人権フェスティバル

その行動 傷つく行動

【ポスターの部 入選】
菊池北中学校3年 城 大河さん

ふるさとを思いがんばつて暮らす人がいます。福島に住む人が今もなお風評被害で苦しまなければいけないのかと悩む現実があることを、僕たちは知らなければいけないと思います。

僕は、今年の秋も東北へ行く機会を得ました。東日本大震災も、熊本地震も、復興の途中です。しっかりと自分の目で見てきたいと思えます。地震は、僕にとって一生忘れる事のできない出来事だつたと思います。失つたものも大きかつたけど、毎日の当たり前が当たり前ではない有り難いことだと実感しました。毎日の「おはよう」「いただきます」「ただいま」「おやすみ」が言える事は幸せなことです。

僕たちは、人の言葉や優しさに救われ、逆に言葉で傷つけてしまう事もあります。しっかりと現実を知り、情報だけにまどわされな

最後に、彼女の作文を通して親子でたくさん話をしました。母は「こつやっていろいろ話せる時間をもてたことが幸せだな。」と言っていました。福島から伝えてくれたおかげです。ありがとう。

受賞した大賀唯人さん

交流の絆 ～姉妹友好都市通信～ ③

問い合わせ先 市長公室 ☎0968(25)7252

西米良村で夏の涼を感じませんか

菊池市の姉妹都市である宮崎県西米良村。村内を流れる一ツ瀬川は鮎釣りを楽しめる清流として有名です。今年も6月1日(金)の川開き(鮎釣り解禁)以降、県内外から多くの愛好家が鮎釣りを楽しんでいます。

夏の一ツ瀬川のもう一つの楽しみとして毎年人気なのが、西米良温泉ゆた〜とに登場する期間限定の「にしめら川床」。

一ツ瀬川の流れに架けられた川床には畳が敷かれ、水の音と爽やかな風を感じながら、西米良の美味しい食事を堪能できます。

暑い夏、西米良村で山と川の涼を感じませんか。

にしめら川床 ※要予約
期 間：7月14日(土)～9月15日(土)
午前11時～午後2時30分
予約先：米良の庄 ☎0983(36)1833

菊池グリーンツーリズム

ふるさと緑の便り

問い合わせ先 西くちふるさと水源交流館 ☎0968(25)0102

インバウンドの可能性

インバウンドとは、日本を訪れる外国人観光客の誘致を表す言葉です。国では訪日外国人旅行者数を4千万人にするという目標が掲げられ、水源交流館でも3年前から英語圏の外国人のツアーを受け入れています。

ありのままの風景を楽しむフットパスや、地元住民による野点、原井下りアドベンチャー「アイデアベンチャー」の体験、地元食材を使ったランチ提供などを行っています。参加者は、何げない自然や旬な食べ物など、日本のあるものの生活体験を楽しんでいるようです。

インバウンドの推進には、言葉の壁やハード面の整備などが課題として挙げられますが、日本人の「おもてなしの心」で、特別でないもの、ありのままの姿を提供することも重要ではないかと考えています。

わいふ一番館だより

問い合わせ先 わいふ一番館 ☎0968(24)6630

【ギャラリー】
「原式押し花グループ展」 原式押し花菊池グループ
期 間：7月10日(火)～7月22日(日)
野に咲く可憐な花たちに語りかけながら、「額の中で今一度の命を」と心を込めて創作しました。どうぞご来館ください。

【まちかど資料館】
西郷どんと菊池一族 ～そのルーツを辿る～
期 間：～7月31日(火)
料 金：大人200円、小中学生100円

写真や絵画などを展示しませんか。
わいふ一番館ではギャラリーに作品を出展する人を募集しています。個人・団体は問いません。詳しくはわいふ一番館までお尋ねください。

開館時間 午前9時～午後5時
※休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)

お茶会を体験

お茶会を体験

韓国発見シリーズ ⑥2
ほんにちは金です

Z世代の登場

韓国に最近、「Z世代」という用語が誕生した。1990年代半ばから2000年代半ばの間に生まれた年齢層で、彼らは生まれた時からフェイスブックやYouTubeなどのSNS(ソーシャルネットワークサービス)と一緒に育つた世代だ。

関連する統計によると、Z世代のYouTube利用率は86%で、他の世代を圧倒する。Z世代のYouTube活用法で多いのは「見る方法」と検索すること、その検索量は毎年増加傾向にある。彼らは文章より映像で知識を得る傾向が強い。実際YouTubeには、専門的なドローンの操作方法から日常的な前髪を切る方法など、幅広い動画が溢れている。彼らは情報技術(IT)に慣れているというより一体化している。Z世代にとってパソコンや文書テキストはすでに旧時代の産物だ。スマートフォンで日常生活の全てを撮影し友達に送る。そして目の前にいる人よりソーシャルメディアを通じて人間関係を重視する。

スマートフォンの使用が始まって10年、韓国はIT強国らしく小学生的スマートフォン使用率が世界1位だ。ある研究報告書によると、ソウル地域の小学生の72%がスマートフォンを持っている。こうしたスマートフォンの使用は家庭や学校で親や先生たちを悩ませていく。子どもたちは友達とチャットでやりとりして宿題を確認したり、嫌いな子の悪口を書き合っている。温床にもなっている。学校もいじめ問題にはお手上げの状態だ。しかし、現状は小学校入学の時にスマートフォンをプレゼントされる子どもたちはますます増えている。他の子が持っているのに我が子だけ持っていない状況に、何人の親が抵抗できるだろうか。

こうした現実には、大統領府への国民嘆願掲示板には子どもたちのスマートフォンを購入および使用を制限する法律を作してほしいという保護者の要求が1日に数十件ずつ寄せられている。

フランスでは今年の秋から全ての小中学校教育機関でスマートフォンの使用を禁止する法律を施行するそうだが、IT強国韓国はこの問題にどのような結論を出すだろう。